

4年制大学設置の構想と土地探し

1959

香川綾は、特色ある専門教育を行う場としての短期大学を育みつつ、4年制大学の開設を構想していた。食物を扱う学問分野として、古い歴史をもつ農学部と、新制大学制度発足と同時に生まれた家政学部があった。しかし、農学部は、食物を主に食糧(料)、食品の面から取り扱う分野であり、家政学部は、食物を衣料、住居、保育とともに主に家庭経営の面から取り扱う分野である。栄養学部とは、視点の中心を「健康」に置き、健康と食物との関わり合いを展開した学問体系をつくらうとする分野であり、新しくつくる大学として、「栄養学部」の構想をたてた。

4年制大学を開設するには、文部省(当時)の大学設置基準により、学生数に応じた基準以上の土地が必要で、新しく土地を購入する必要があった。昭和30年代の初めは当時の国鉄の沿線や他の私鉄沿線に比べ、東武東上線はまだ拓けておらず、地価も安価であった。また、駒込校舎からの乗り換えも考慮して、東武東上線沿線の、川越以遠の土地を探すことに決めた。その結果、1959(昭和34)年、坂戸駅と鶴ヶ島駅のほぼ中間に位置する土地を購入した。



坂戸校舎建設予定地を視察

女子栄養大学の開設

1961

1961(昭和36)年、2年間の申請期間を経て、念願の大学設置の認可を受けた。しかし当時は、栄養学は家政学部食物学科の一授業科目に過ぎないという認識もあり、栄養学部という前例がない学部の新設は認められなかった。さらに、家政学部に栄養学科を設けることも認められず、「家政学部食物栄養学科」としてようやく認可されることとなった。

香川綾は、『栄養と料理』1961(昭和36)年5月号に「女子栄養大学の開学に際して」と題して、大学レベルの栄養学を必要としている時代に向けて、「ゆたかな生活感覚を備えた栄養学者を育成して、次代の女子教育に人間性と科学性の向上に期したい」と語っている。



女子栄養大学家政学部1年生



1961(昭和36)年
女子栄養大学開学式で挨拶する香川綾(62歳)